

江戸っ娘事件帖

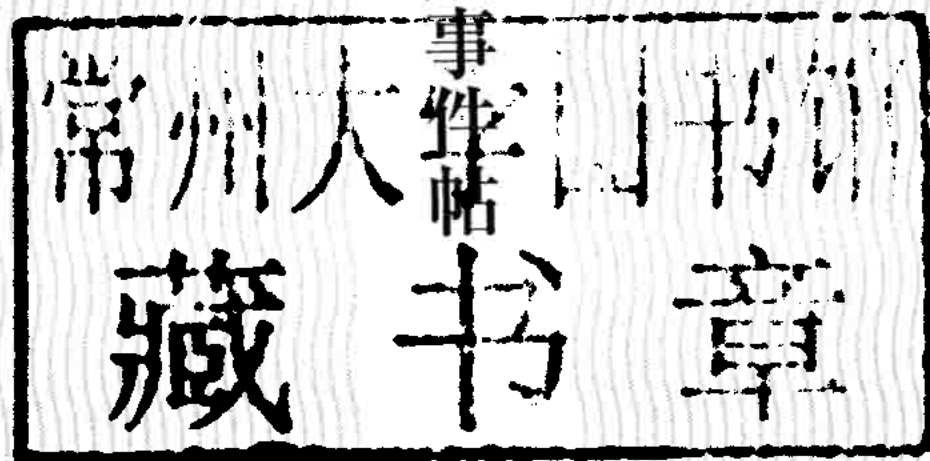
えどっこじけんちゆう

鳴海丈



学研M文庫

江戸っ娘に
事件帖



鳴海丈

学研M文庫

江戸っ娘事件帖

なるみ たけし
鳴海 丈

学研M文庫

2013年9月24日 初版発行



発行人——協谷典利

発行所——株式会社 学研パブリッシング

〒141-8412 東京都品川区西五反田2-11-8

発売元——株式会社 学研マーケティング

〒141-8415 東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

© Takeshi Narumi 2013 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは——編集部直通 Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——

販売部直通 Tel 03-6431-1201

・文書は、〒141-8418 東京都品川区西五反田2-11-8

学研お客様センター『江戸っ娘事件帖』係

★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。

Tel 03-6431-1002 (学研お客様センター)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複製権センター TEL 03-3401-2382

<http://www.jrrc.or.jp> E-mail: jrrc_info@jrrc.or.jp

Ⓒ 〈日本複製権センター委託出版物〉

目次

第一話 妹は柔術小町じゆうじゆつこまち 〱 死の足音 〱

幕間 花嫁行列 (書き下ろし)

第二話 ふたり姫ひめ

第三話 娘死客人・手車お凶むすめしかくにん てくるま きよう 〱 闇に棲む者やみ す 〱

第四話 水底の死美人すいてい しびじん

第五話 手車お凶対斬環お龍てくるま きよう ざんかん りゆう 〱 黄金地獄 〱

外伝 源太お咲・夫婦十手げんた さき めおとしつて 〱 赤の死人あか 〱

解説

江戸っ娘事件帖

鳴海 丈

学研M文庫

目次

第一話 妹は柔術小町じゆうじゆつこまち 〱 死の足音 〱

幕間 花嫁行列 (書き下ろし)

第二話 ふたり姫ひめ

第三話 娘死客人・手車お凶むすめしかくにん てくるま きよう 〱 闇に棲む者やみ す 〱

第四話 水底の死美人すいてい しびじん

第五話 手車お凶対斬環お龍てくるま きよう ざんかん りゆう 〱 黄金地獄 〱

外伝 源太お咲・夫婦十手げんた さき めおとしつて 〱 赤の死人あか 〱

解説

第一話 妹は柔術小町（死の足音）

一

その男は、街道の端にある石の上に腰を下ろして、のんびりと煙草を喫っていた。十返舎一九の『身延道中記』に「これより峠いたって難所なり」と書かれた甲州街道の小仏峠、その九十九折りの険しい道を東へ少し下りたあたりである。

街道の両側は鬱蒼たる林で、菅笠を被った旅支度の小柄な男以外に、人けはない。

小男は四十前後だろうか、目は糸のように細く鼻も口もちんまりとしていて、人生に疲れ切ったような貧相な顔立ちである。月代と不精髭を伸ばし放題にしていた。腰には、護身用の道中差を帯びている。

江戸から甲府までを最短距離で結ぶために、大久保石見守によって整備された甲州街道は、後に下諏訪まで延長されて、中仙道と結ばれた。

小仏峠は、武州・駒木野宿と相州・小原宿との間にあり、武蔵国と相模国の国境になっている。夏の真つ盛りで、昼下がりの樹木のトンネルの中は、蒸されるようだ。聞こえるのは、蟬の声

と小仏川の遠いせせらぎだけ。

と、峠の方から下つてきた者がいた。

三度笠さんどを被り、合羽かっぱを肩にかけて着物の裾すそを臀端折しりはしよりにした中年の渡世人とせいにんであつた。その足の運びのリズム、腰の据すわり具合、頑丈がんじょうそうな拵こしらえの長脇差ながとすから、年季ねんきの入つた本物の博奕打ばくちうちだということがわかる。

煙草を喫っている髭の小男を、ちらつと見て、渡世人は、そのまま通り過ぎようとした。

「その兄にいさん」

小男が突然、彼に声をかけた。のんびりした口調であつた。

「——俺おれかい」

渡世人は足を止めて、小男の方を見た。三度笠の前を持ち上げて、不審とせいげにその髭の小男を見下ろす。

「峠の頂上で、富士のお山は見なすつたかね」

「おう。拝んできたぜ。晴れているから、大層はつきりと見えた」

小仏峠は、古くは〈富士の峠〉と呼ばれたほどで、そこから見る富士山は絶景だといわれてきた。

「それが、どうかしたのかい」

「何ね」

髭の小男は、天気の話でもするように、あつさりと言った。

「お前さんがこの世で最後に見たものが、富士のお山でよかったと思つてなあ」

「野郎っ」

渡世人は怒氣を露わにして、三度笠を放り出して長脇差を抜く。

「俺を天神の喜三郎と知つてのことかつ」

林の中の蟬が鳴きやんだ。小男は、抜身の長脇差を見ても、別に怯えた風でもなく、

「まあね。吉野の宿で、お前さんが土地の者に、そう名乗っていたのを聞きましたよ」

吉野宿は、小仏峠の先の小原宿から西へ二つ目の宿駅である。

「吉野……そんな前から俺に目をつけ、追い越して待ち伏せしてたつてのか。一体、てめえは：

ぐっ!？」

喜三郎は驚愕した。突然、背後から首に細引きのようなものを巻かれて、力いっぱい絞められ

たからである。

彼の背後にいるのは、岩を削ったようなごつい顔つきの大男で、腕も丸太のように太い。二十

代後半の大男は、両端に分銅の付いた細い銀鎖で喜三郎を絞めているのだった。

街道の端に座りこんでいた小男は囧で、渡世人がそちらに気を取られている間に、道の反対側

の繁みの中に隠れていた大男が、背後から襲ったというわけだ。

長脇差を放り出して、喜三郎は両手で銀鎖を引き剥がそうとするが、あまりに細いので、喉と

の間に指先が入らない。首が汗で濡れているので、なおさらであつた。

喜三郎が無駄な藻掻きをしている間に、髭の小男が、ゆっくり立ち上がった。貧相な顔に、獐猛なほどの殺意が溢れている。

道中差には触れずに、懷から匕首を抜くと、喜三郎の胸に突き立てた。

「……………っ！」

喜三郎の体が反りかえり、そして、急にぐったりと力が抜けた。絶命したのである。無念の形相であつた。

匕首の周囲に合羽を巻いて血が落ちないようにしてから、大男は、喜三郎の死骸を林の中へ運ぶ。小男は、地面にわずかに落ちた血痕を、乾いた土をかけて目立たなくすると、三度笠と長脇差を拾い上げて、林の中へ入った。

林の奥に、昨夜のうちに掘っておいた穴がある。大男は、その穴へ喜三郎の死骸を捨てた。懷から金の入った胴巻きを引き抜き、そして胸から匕首を抜いて、合羽の端で丁寧にく。

小男が来て、三度笠と長脇差を死体の上に投げた。

「うまくいったな、左助兄貴」

大男から匕首を受け取って、左助と呼ばれた小男は、懷の中の鞘に納める。

「勿論さ、右太。俺たち、黒地蔵に失敗なんかあるわけねえ」

「そうだな、兄貴の考えに間違いはねえものな」

右太という大男は、満足そうに頷く。

「たんまり、入ってるかい」

「んーんと……十七、八両かな」

「さすがに、甲州でも指折りの顔役だな。頂いておきな。死人に銭はいらねえ……いや、待てよ」
左助は、胴巻きに手を突っこむと、一文銭を六枚取り出して、そいつを死体の胸元へ放り投げる。

「ほらよ、三途の川の渡し賃だ。迷わず地獄へ堕ちるんだな」

それから二人は、天神の喜三郎の死骸に土を被せた。右太の怪力のおかげで、あつという間に埋葬は完了する。

それから、二人は街道へ戻った。目撃者は、誰もいない。左助と右太は、肩を並べて坂道を下った。

「右太、風邪の具合はどうだい」

「んー……まだ、喉が痛てえ」

「そうか。次の宿場に薬屋がいたら、葛根湯か何か買おうじゃねえか」

「うん、兄貴はやさしいから好きさ」

「夏の風邪はこじらせると、命取りだっていうぜ。次の仕事は江戸だ。旅籠で精のつくものでも喰って、たっぷり寝りゃあ治る」

「うん、うん。江戸の仕事は、女じゃなくて男だといいね」

「女を殺^やるのは、嫌か」

「嫌じゃねえけど……何だか、死んだ母^{かあ}ちゃんを思い出すから……やっぱり、嫌だ」

「そうか——」

黒地蔵という二人組の殺し屋の姿は、曲がった道の向こうへ消える。ようやく安心したように、林の中の蟬が鳴き出した。

十代將軍家治^{いえはる}の治世^{ちせい}——世^よにいう田沼^{たぬま}時代のことである。

二

「起きなよ——」

その声は聞こえたが、修吉^{しゅうきち}は枕にかじりついたまま、目を開けなかった。

「起きなつてば、兄^{あに}ちゃん」

声の主は、修吉の脇腹^{わきばら}を足の先で蹴^ける真似^{まね}をしながら、くすぐる。

「むひよほほ……馬鹿^{ばか}つ、くすぐつてえじやないか」

目を開くと、すんなりとした若さの漲^{みなぎ}る剥^むき出しの足が二本、その付け根^{つけね}を包んだ臙脂^{えんじ}色^{いろ}の木股^{また}が彼の視界に飛びこんできた。

「何て格好だ、お晶。そこに立ったら、大事なところが丸見えだぞっ」

「いいじゃん、見えても。兄妹なんだから」

十七娘のお晶は、にっと笑った。肌は浅黒く、眉が濃くて、目が驚くほど大きい。

美人だが、化粧つけは全くなく、艶やかな黒髪は後ろで無造作にまとめて元結で括り、小馬の尻尾みたいにだらりと背中に垂らしていた。

袖無し半纏に細い帯、胸元まで、きりりと白い晒し布を巻き上げて、木股を履いている。小柄だが、手足は長く伸びやかだ。

若い娘が脛どころか太腿まで剥き出しの男の格好をしているというのは、この江戸でも、かなり珍しい。町娘というより、山の中で生まれ育った野性の娘といった感じだ。

「馬アー鹿」修吉は渋々、上体を起こして、

「親しき仲にも礼儀あり——って端唄だか長唄だかの文句にもあつたじゃねえか」
がりがりと伸びっ放しの月代を掻く。

今年で二十一になる修吉は、痩せた長身の若者で、素肌の上に身幅の狭い渦巻き模様の着物を着ていた。

決して美男子ではないが、鼻梁が高く、意地っ張りの証拠のような大きくて唇が厚い口、男っぽさと子供っぽさの同居した不思議な顔立ちである。

「何で起こした。朝飯か」

「何を言つてんだか」

お晶は窓の障子を、がらりと開けて、

「見てごらん、もうすぐ正午だよ。そろそろ店が混み出すから、手伝えつてさ、おじさんが」

「逆鍋頭ぎやくなべがそんな口ききやがったか、生意気な。はばかりながら、この修吉様はなア、末はお大だい尽じんか学者先生かつていう大物だよ。大人物ですよ。その大人物に、吹けば飛ぶよな一膳飯屋いちぜんめしやで小女おんなの真似をさせるなんて、罰ばちが当たるぜ、まったく」

「――面白れえ。罰でも富籤とみくじでも何でも、当ててもらおうじゃねえか」

梯子階段はしごの方から、ぬーっと首を突き出したのは、この店の親爺おやじの徳治とくじである。

捻り鉢巻ねじ はちまきをした額ひたいが、月代を剃るそ必要がないほど見事に禿はげ上がり、油を塗りこんだような色艶いろでんをしていた。五十代半ばの頑固者がんこものの徳治、団栗眼どんぐりまなこで、ぎろりと修吉を睨にらむ。

「あつ、おじさん、お早はやうございますつ」

瞬時に、目尻めじりを下げて白い歯を見せ思いつきり作り笑いをする修吉であつた。

「寝惚ねぼけるな。お早はやうって挨拶あいさつは、お天道様てんとさまが東の空からのぼって半刻はんときまでの間に言うんだ。その緩ゆるんだ面つらを洗つて、しゃっきりしたら、さつさと店を手伝いな、末はお大尽の大人物さんよ」

「はいはいつ、ただ今、すぐにっ」

修吉は、米搗こめつき飛蝗ばったのように頭を下げる。以前に徳治に口答えしたら、包丁の柄えの先で、目から星が飛ぶほど力いっぱい頭を叩たたかれたことがあるのだ。

「お晶、おめえも早く下りろ」

「うん」

二人が梯子階段を下りてゆくと、

「けっ、つるぴかの逆鍋の分際で人間様に命令しやがる……しょうがねえ、起きるか」

修吉は、煎餅布団せんぺいぶとんを押入に適当に投げこんで、梯子階段を下りる。

その店は〈まんぷく亭てい〉という屋号で、上野広小路うえのひろこうじの北大門町きただいまんちやうにあった。江戸府内では日本橋

に並ぶ人通りの多い場所だし、親爺の徳治は口こそ悪いが料理の腕は確かで、しかも値段も安いときているから、かなり繁盛している。

徳治は元は十手御用じつてごようを勤める岡っ引おかびきだったが、年をとって足腰が弱ったので、十年ほど前に手札ふだと十手どうしんを同心だんなの旦那に返上し、この店を開いたのである。

その時、長年の功により、お奉行様おぎようから大層な額のご褒美金ほうびきんをいただいたそうだと。店の開店費用は、ほとんどそれで賄まかなえたという。

町奉行所まちしよとしては、引退した岡っ引に繁華街で飲食店をやらせておけば、情報収集などの拠点となる——という腹づもりもあったに違いない。

修吉とお晶の兄妹は、九年前に火事で両親を亡くして、遠縁の徳治に引き取られたのだった。

最初のうちはおとなしく店を手伝っていた修吉であったが、やがて酒と遊びの味を覚える年頃としごろになると、しょっちゅう仕事を放り出して朝帰りという始末。